

## TOPICS

- ① 数理・データサイエンスAI教育部門の取組、数理・データサイエンス・AI教育プログラムについて
- ② S-Basic「チームワークとリーダーシップ」における学生（ラーニングアシスタント）との振り返り
- ③ 高等教育研究開発センタープロジェクト活動報告「コモン・ループリックの再検討について」
- ④ S-BASICにおける「コミュニケーション英語Ⅳ」の構築

## 数理・データサイエンスAI教育部門の取組、 数理・データサイエンス・AI教育プログラムについて 杉原 亨

令和5年度の数理・データサイエンスAI教育部門の取組として、大きく3つが挙げられます。

### （1）「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」におけるリテラシーレベルの認定

令和5年度に文部科学省より本学の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」はリテラシーレベルに認定されました。修了要件は、次のS-BASIC科目（3科目3単位）になります。

- ・情報リテラシー（必修：1単位）（1年生前学期15回）（演習）  
データサイエンスの基礎知識とリテラシーとなる、文献やデータを読み解き、分析、考察、表現するための情報リテラシーを身に付ける。WordやPowerPointの活用がメイン。
- ・データリテラシー（必修：1単位）（1年生後学期15回）（演習）  
実データとデータ解析ツールを用いた演習を通して、データを読み、処理し、説明するというデータサイエンスの基礎知識と利活用を学ぶ。Excelの活用がメイン。
- ・情報社会とデータサイエンス（選択：1単位）（8回）（講義）  
研究開発、医療、介護、環境といった各領域における事例を通して、社会で活用されているデータと、そのデータを処理するAIといった技術の利活用領域が広がりや、技術を用いて日常生活や社会の課題解決が行われていることを学ぶ。

プログラム対象科目をすべて履修し、単位を修得した学生には、プログラムを修了した証明として、「オープンバッジ」というデジタル証

明書を授与します。オープンバッジは就職活動などでの活用を想定しています。

リテラシーレベルの修了率は、プログラム開始の令和4年度では発展途上であり、今後、修了率を向上するために、オリエンテーションなどでの更なる周知、オンデマンド授業（特に講義科目の「情報社会とデータサイエンス」）に関して検討します。

### （2）S-BASIC科目「統計分析法」の取り組み

・統計分析法の概要（選択科目）  
従来の統計の基礎的学習を踏襲しながら、より「データの可視化」に焦点を合わせた科目としました。データ可視化の手法として、BI（Business Interigense）ツールTableau（タブロー）を活用し、その他にe-Stat（政府統計）や、RESAS（地域経済分析システム）の活用した可視化も行いました。令和5年度は人文学部人間科学科で先行実施し、令和6年度から全学で展開します。そのために、全ての担当教員に対して、これまで活用した教材をGoogle Classroomで共有する仕組みを構築中です。また、一部の授業では、サッカーチームと連携し、提供されたデータで分析を行い、施策の提案まで行う予定です。さらには、この統計分析法に対応した独自の電子教科書の作成を検討しています。

この授業で使用するTableauは、多くの大手企業（もしくは自治体、教育機関）で活用されており、習得すれば将来のキャリアに役立ち、就職活動においても高く評価される要因となります。また、習得にあたりTableauの画面はカラフルで視覚的な楽しさがあり、操作はクリックベースで全て可能で、プログラムはいらないので敷居は高くありません。（次ページへ続く）

授業では、はじめに解説動画も活用しながら Tableauの基礎的操作法を学習した後、大学生の学習に関するデータを分析しました。次に3人1組のグループで分析についてディスカッションした後、プレゼンテーション用の資料を作成し、発表を行いました。写真は授業中の様子で、モニターはTableauの画面です。

### (3) 生成AIへの全学的な対応

令和5年9月に、学生向けに生成AIに関する大学としての方針を通知しました。文部科学省が通知で示した内容や多くの大学で示された内容と同様に、生成AIの適切な活用を促しています。また、各キャンパスにおいても、生成AIをテーマとしたFD研修会が開催されました。

その中の一事例として、令和5年9月に千葉キャンパスでは専任教員及び非常勤講師を対象としたFD研修を実施しました。研修は参加者がPCを持参したうえで、ChatGPTの登録から行うハンズオン型で進行しました。初めてChatGPTを扱う教員も一定数占められており、冒頭は登録方法などで戸惑っていた様子でしたが、実際に体験を通じて生成AIの性能を実感することができ、今後の学生指導にもつながったと考えられます。

数理・データサイエンスAI教育部門では、今後も全学の数理・データサイエンスAI教育に関する支援を行ってまいりますので、引き続きよろしくお願いいたします。

(高等教育研究開発センター准教授 杉原亨)



図1 2023年度後学期統計分析法の授業の様子①



図2 2023年度後学期統計分析法の授業の様子②

## 先生方が取り組まれている面白い取組等の事例紹介# 3 S-Basic「チームワークとリーダーシップ」における学生 (ラーニングアシスタント)との振り返り 田中元基

ここでは、本年度より開講となった基礎教育科目(S-BASIC)「チームワークとリーダーシップ」について報告する。本科目では、ラーニングアシスタント(LA)<sup>1)</sup>と呼ばれる学生が主体となって授業運営などを行い、教員はLAのサポート的な形で授業に関わる。本科目は、全国初(淑徳大学調べ)の全学必修のリーダーシップ教育(大学プレスセンター, 2023)と紹介されている科目でもあり、「事例紹介として良いかもしれない」と思い、授業運営の主体が学生となる科目において、教員がどのように関わるかという点に注目しながら、報告者の事例を紹介していく。なお、報告者は、本年度2キャンパス(東京、千葉第二)で合計3回分の授業を担当した(東京キャンパスでは後期2回開講)。

「チームワークとリーダーシップ」は、学生(LA及びコースアシスタント:CA<sup>2)</sup>)、企業(株式会社イノベスト)、教員の3者が関わりながら実施されていった。ここでは、授業準備、授業運営、授業後のふりかえりという3ステップに整理し3者の大まかな動きを簡単に紹介する。

**授業準備:**企業がベースとなる授業スライドの提供や授業の進め方に関する説明をLA・CA、教員に対して行う。LAが中心となって、ベースとなる授業スライドに独自の補足を加えたり、履修生の関係性や様子を加味したペア・グループ作りを事前に行う。教員は、Googleクラスルームなどのツールを使った授業後課題の提出に関する準備、必要に応じてLAからの相談などに応じた。

**授業運営:**基本的にはLAが主体となって授業が行われた。教員は、履修生の様子を見つつ、LAのサポートとしてスライドの補足説明や、グループワーク時の巡回・声掛けなどを行った。報告者の印象としては、履修者が授業の進め方や雰囲気をも十分に把握できていない1・2回目の時期において、教員から「LAの言っているように動いてね」と積極的に声掛けを行うことで、LA主体の授業であるという雰囲気づくりをすると良いように感じられた。

**ふりかえり:**ふりかえりは、各クラスで実施した授業に対するポジティブな点や次回よりよくできそうな点を挙げていき、全体でシェアしていった。報

告者の担当したキャンパスでは、「授業後に、LA・CA、教員、企業の3者で集まり、対面でふりかえりを行う」という対面形式でふりかえりを行ったキャンパスと「共有ドキュメントでふりかえり項目を挙げていく」という非対面形式を中心にふりかえりを行ったキャンパスがあった。非対面形式のふりかえりは、共有ドキュメントに入力された内容をふまえ、LA・CAと企業の2者によるオンライン上でのふりかえりが追加で行われていた。ふりかえりに対する報告者の印象としては、対面・非対面ともに異なるメリットを感じた。対面は、教員からのフィードバックをLAがどのように感じたか・受け止めたかといった様子を把握しやすいというメリットを感じた。非対面は、文字でふりかえりを行うため、口頭よりも、ふりかえる内容をしっかりと考えられるメリットを感じた。

ここで紹介した内容は、報告者の立場から見た動きであり、見えない部分での動きもある。たとえば、授業数日前に集まり、スライドを追加するかどうかなどの進め方の相談をしたり、早めに教室に来て履修生への声かけを行って関係性構築を図るといった動きもあった。報告者がLAとの会話や振り返りの中で耳にしたものであり、各LA・CAが教員の見えないところで独自の動きをしていると思われる。

注

- 1) ラーニングアシスタント(LA): 授業運営(授業進行や、グループワーク中の机間指導)の主体となる上級学年学生。
- 2) コースアシスタント(CA): 本授業は、同じタイミングで複数のクラスが開講される。その中で、LA全体のサポートなどを行う学生。

引用

大学プレスセンター(2023)【淑徳大学】全国初の取り組みとして全学必修のリーダーシップ教育を実施。

<https://www.u-presscenter.jp/article/post-51618.html>

付記

本授業の紹介についてご了承いただきました、廣岡駿一様(株式会社イノベスト)に感謝申し上げます。

(高等教育研究開発センター

人文学部 人間科学科 助教 田中元基)

### 1. はじめに

高等教育研究開発センタープロジェクト活動の取り組みの一つとして、今年度は、淑徳大学へ全学的に導入されている「コモン・ルーブリックの再検討」を実施しましたので、ご報告いたします。

### 2. コモン・ルーブリックの再検討に関する経緯について

淑徳大学で全学的に導入するコモン・ルーブリック（以下、コモン・ルーブリック）は、関西国際大学のコモンルーブリック（当時）を参考として、2013・2014年に淑徳大学に導入されました。具体的には、統合型、スキル型のルーブリックであり用途に応じて活用できるように配慮されています（詳細は以下参照）。

#### 淑徳大学「コモン・ルーブリック」一覧

- 「目標型コモンルーブリック（学修成果の統合）2014」
- 「目標型コモンルーブリック全体版（チームワーク）2013」
- 「コモンルーブリック（プレゼンテーション）2011」
- 「コモンルーブリック（ライティング）2012」（1年生春学期～2年生春学期）下位学年用
- 「コモンルーブリック（ライティング）2012」（2年生秋学期～）上位学年用
- 「コモンルーブリック（ライティング）2012」

導入当時には全学的FDを実施し、コモン・ルーブリックの紹介や、学科内でルーブリックの使用を推奨してきた経緯がありました。こうした取り組みを経て、全学的に活用されてきましたが、2023年度現在では、導入から10年が経過しており、学生・教職員ともに世代が入れ替わっていることもあり、「コモン・ルーブリックの再検討に関する事項」が高等教育研究開発センターの調査課題の一つとして位置付け

られました。そこで、高等教育研究開発センターのプロジェクトメンバー（※）では、調査課題として(1)現在の本学での使用実態はどうなっているのか、また、(2)使用している場合、現在のコモン・ルーブリックにはどのような利点・課題がみられているのかを整理することとしました。

### 3. コモン・ルーブリックの活用実態について

調査課題(1)については、2019年度に高等教育研究開発センターが実施した「ルーブリック事例調査」（コロナ禍前）の結果を利用しました。結果からは、ルーブリックの活用件数は42件報告されており、そのうち、コモン・ルーブリックの活用事例は10件でした（内訳：看護学科8件、栄養学科1件、表現学科1件）。この結果を受け、詳細な活用実態を調査するため看護学科、人文学科教員へのヒアリング依頼を行いました。

### 4. コモン・ルーブリックを活用する学科へのヒアリング調査

以下、コモン・ルーブリックを活用した学科の教員らへのヒアリング調査から挙げた意見を抜粋してまとめたものです。ヒアリング調査では、両学科から以下のコモン・ルーブリックを活用しての所感、使用してみえてきた課題について聞くことができました。

#### ①コモン・ルーブリックを活用しての所感

- ルーブリックを使用することによって、学生へ対して課題で何を求めているのか（目標）、今の自分はどの時点なのか（振り返り）を伝えることができる
- 指導や学生の振り返りのために利用する
- セルフチェックとしての役割を果たしている

(次ページへ続く)

## ②使用してみえてきた課題

- ルーブリックの使用がそのまま成績評価につながるわけではないため、何を目的に使用するかの設定が必要。
- ルーブリックの用語がやや難しく、学生が理解しているのか疑問。理解できていないのではないか。（例：段落が適切に作られている論理的なプロセスをたどることができる）
- チェックリストの方が学生の理解度が高い。学生にとっては、レベル2とレベル3の違いを理解するのが難しい。
- 「チームワーク」のルーブリックは「グループワーク」のルーブリックになっているのではないか。

## 5. 今後、どのような展開が考えられるのか

ルーブリック事例調査（2019年）や今回のヒアリング調査を経て、高等教育研究開発センターのプロジェクトメンバーでは、コモン・ルーブリックの今後の展開について、3点をまとめました。

1点目は、「教職員間での議論と意見交換の場を設ける」です。具体的には、FD研修会を活かして、「ルーブリックとは何か」、「各学部・学科がどのような内容でルーブリックを運用しているのか」、「運用する上でどのような課題があるのか」について、全学的な議論の場（ワールドカフェのような場が望ましい）を設けることが必要だろうという意見があがりました。また、淑徳大学生の立場からみたルーブリックの使用実態や課題を十分に検証しきれていないため、学生に対するルーブリックに関するアンケート調査やヒアリング調査を実施することが求められることが分かりました。この調査を実施することで、学生側からみたルーブリックに対する課題を明らかにすることができ、改善課題を提示できると思われま

す。2点目は、「学生に明確に説明する」です。1点目と重なる点がありますが、学生に対して、ルーブリックの使用目的や役割、レベルを明確に説明する必要があることがみえてきました。

教員にとっては慣れている評価指標であっても、学生にとってはどのような意義があって、何のために使用するのか分からない可能性が示唆されました。また、レベル感は、全学的な統一を検討するならば、まずはS-Basicの「初年次セミナー」が妥当だという意見も挙がりました。その後、他の科目への応用可能性を検討することが求められそうです。なお、現在ではルーブリックと成績評価のつながりは曖昧であるため、今後、成績評価との関係性をシラバスへの記載し、授業内での説明する必要性もあります。

3点目は、「ルーブリックの運用と改訂方針について」です。具体的には、作成したルーブリックが年月を重ねるにつれて、社会のニーズやカリキュラム改定等によって必ずしも好ましい内容でなくなることを事前に想定しておき、ルーブリックの運用期間と検証期間を設定することの重要性も挙がりました。例えば、8年ほどの運用期間を設けて改善点を検証し、10年後を目安に改訂版を作成し運用するなどの意見が挙がりました。

2023年度のプロジェクトでは、実際にコモン・ルーブリックの再検討までは至りませんでした。これまでのコモン・ルーブリックの使用実態や活用してみえてきた利点や課題について明確にすることができました。調査を進めるなかで、各学科の特色に合わせたルーブリックの開発・実施を行う学科の例も多数上がっており、ルーブリックという評価指標が珍しいものではなくなっている実態がよくわかりました。こうしたなかで、淑徳大学としての共通のルーブリックを改めて議論して設定することは重要なみがあるように思います。

※「コモン・ルーブリックの再検討に関する事項」プロジェクトメンバー  
唐澤 克樹、御手洗 明佳、加藤 梨乃

（高等教育研究開発センター  
教育学部 准教授 御手洗明佳）

# 大学共通の英語教育プログラムの開発（基盤教育部門） —S-BASICにおける「コミュニケーション英語Ⅳ」の構築— 畑江美佳・今村有里

## 1. はじめに

全学共通の基礎教育科目（S-BASIC）は、どの学部学科でもこれからの社会を生き抜くために必要な基本的な力（知識・技能・態度）を身に付けることを目標にした、本学の特色ある基礎教育カリキュラムとして、2023年4月から開始された。英語教育では「表現力の養成」の中で、「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」が必修科目として1年次及び2年次前学期に、「コミュニケーション英語Ⅳ」が選択科目として2年次後学期に設定されている（地域創生学部は2年次 第1クォーターに開講）（図1）。英語は必修だから仕方なく勉強するという消極的学習者が多い中、選択科目となると受講者数は激減するのが常である。しかしながら、国際社会でも日常生活でも、様々な場面において英語力の重要性がますます高まるとされるため、「コミュニケーション英語Ⅳ」では、学生が将来必要とする英語運用能力を細分化し、多様な選択肢を準備して提供しなければならないと考える。

## 2. 旧カリキュラム「英語Ⅲ」の実際

選択科目である「英語Ⅲ」は、担当教員により異なる授業内容で実施されていたが、S-BASICの開始に伴い2024年度より削除となる。2023年度、各キャンパスにおける受講者数は、

千葉13名、千葉第二33名、東京28名、埼玉48名（「英語Ⅲ」がない代わりに、「英語Ⅲ」に読み替え可能な「実用英語Ⅰ・Ⅱ」「観光英語A・B・C」の合計が48名）である。本セッションでは、「英語Ⅲ」の実際について、2023年度総合福祉学部と人文学部の授業例を示したい。

### 2.1 総合福祉学部「英語Ⅲ」 （eラーニングによる学習）

2023年度受講者数は13名、eラーニングによるリスニング・文法・リーディングの個別学習に、スピーキングとライティングの一般的な授業形態による学習を加えることで（ブレンディッド・ラーニング）、「聞く」「読む」「話す」「書く」の4技能のバランスを考慮した授業を展開した。eラーニング教材では、最初に「診断テスト」を受けることで英語力が診断されるため、選択科目で起こり得るクラス内の学力差にかかわらず、最適なレベルのレッスンから学習を開始することができた。また、音声情報だけではなく、動画等の視覚情報が豊富なため学習に取り組みやすく、ストーリー仕立てで様々なシチュエーションの英語に接することで、TOEIC受験を見据えた教材でありながらも日常会話等の習得にもつながった。学生は授業にPC、スマートフォン、

（次ページへ続く）

■表現力の育成：言語表現技能として身に付ける能力…日本語と英語による語学運用能力を習得する



図1 S-BASIC「表現力の育成」英語科目 体系図

タブレット等のデバイス及びイヤフォンを持参し、授業の後半50分と自宅での事前・事後学習にeラーニングを行った。教員は、オンライン上で進捗度及び達成度を毎週確認し、個別にアドバイスを与えた。eラーニング部分の配点は50点にした。一方、授業の始めの40分は、学期の前半にwritingを、後半にspeaking（プレゼンテーション）を実施し、テーマを“Japanese Culture”としてグループでその内容について議論するなど、ピアラーニングを意識した。配点はwritingを20点、presentationを30点とした。

本科目の最大の特徴は、各自の能力に応じた個別学習を可能にするeラーニングを、本学の英語教育の中で初めて導入した点である。この経験は、今後の「コミュニケーション英語Ⅳ」の授業の在り方に示唆を与えるものとなった

## 2.2 人文学部「英語Ⅲ」 （自己主導型学習）

受講者数は28名、自己主導型学習の要素を取り入れ、受講者が個々のニーズに合わせて英語学習に関する目標設定、教材及び学習ストラテジーの選定、学習計画の作成、そして学習計画を1ヶ月間実施することを授業内容に組み込んだ。受講者の学習ニーズが多様であることから、さまざまなオンライン教材（例：YouTube、英語学習アプリ）や生成AIを活用した学習ストラテジーを紹介し、実際に教材やストラテジーを授業内外で受講者自身が試す機会を設けた。また、内省をピアやグループで行うことは学習者の学習過程において重要な役割を担っている(Imamura & Wongsarnpigoon, 2023)ことから、クラス内でスピーキング活動やGoogle Classroomを活用したピアアドバイジングを通して受講者の内省を促すよう工夫した。さらに、履修者と教員との対話的内省を目的としたリフレクションシートを毎回の授業で回収し、翌週に教員のコメントを残したシートを返却した。また、学習の過程と成果について発表する機会を2回設け、受講者はプレゼンテーションを行う上で重要なスライドや原稿の作成

方法、発表者としての姿勢、そしてオーディエンスの心構えを学び、発表を行った。この授業を履修した受講者の中から2名がさらなる英語学習の機会を求めて、全国語学教育学会学習者ディベロップメント部会の30周年記念大会（2023年10月21・22日、学習院大学）に参加し、大会での気づきや学んだことを同部会のニュースレターLEARNING LEARNING（学習の学習）“30th Anniversary Conference Post-Conference Publication”（2024年2月発行）に寄稿した。ニュースレターの中でOzawa（2024）は、大会参加を通して、自身と他の言語を話す人に対して偏見があったことに気づき、自身の価値観をより広げていきたいと記した。Sano（2024）は、英語に苦手意識はあるものの、積極的に英語学習環境に身を置いていきたいと述べた。

本科目では、オンライン教材の使用、生成AIを活用した授業の実践、Google Classroomの活用等、今後の研究の参考となる斬新な取り組みが含まれている。また、英語力の高い学生や意欲のある学生により高いレベルの英語教育を提供できることも、本科目の持つフレキシビリティゆえと考えられる。eラーニングの導入やデジタル・コンテンツの活用等が、大学英語教育の主流となっていくのには、それほど時間はかからないであろう。

## 3. 「コミュニケーション英語Ⅳ」の検討

「コミュニケーション英語Ⅳ」の共通シラバスにおける「授業目的」は「将来のために高度な英語表現力を身に付けたい、就職のためにビジネス英語を学びたい、専門職に必要な英語コミュニケーション力の向上を目指したい、短期海外研修に参加してグローバルな視野を身に付けたい等の目標を持つ学生のニーズに合った授業を展開する」と位置付けている。本科目では、興味のあることや学びたいことを学生が選択できるよう、クラスを複数開講することが

（次ページへ続く）

可能である。言い換えると、学生が受講してみたいような魅力のあるクラスを選択できるよう展開していかななくてはならない。

2023年度の検討段階では、「海外語学研修」、「ビジネス英語」、「英語表現」、「専門英語」の開講を想定していたが、2024年度は、全学において共通してニーズが高いと考えられる「海外語学研修」、「ビジネス英語」の2つのクラスに絞り、4キャンパス同時に実施できるようにオンラインで開講することになった。「ビジネス英語」は、前述の総合福祉学部における「英語Ⅲ」を踏襲したものとなるため、ここでは「海外語学研修」の授業内容について説明したい。

「コミュニケーション英語Ⅳ A海外語学研修」は、国際交流センターが提供している夏期カナダ研修と春期オーストラリア研修を元に、出発前の事前学習（3回）と帰国後の事後学習（2回）による提出物・プレゼンテーションの評価及び現地での「プログラム修了証とスコア」の提出をもって1単位を付与する。事前学習は、海外での生活や文化についての講義や海外で役立つ英語表現の習得を中心に行い、さらに「あなたは今回の海外研修で、何が一番興味を持ち、何について学びたいですか？」と問い、渡航前に予習をさせる。海外研修中はその観点でものごとを見聞し、帰国後のプレゼンテーションの中でそれを発表することで、本研修にアカデミックな要素を持たせ、より深い学びへ

と導くことができよう。

今後は、2024年度開講の2クラスの他に、英語表現力を身に付けることに特化したクラスや、各学科特有の専門英語のクラスの増設を検討していきたい。

#### [参考文献]

Imamura, Y., & Wongsarnpigoon, I. (2023). Promoting reflective dialogue through introductory self-directed learning courses. In N. Curry, P. Lyon, & J. Mynard (Eds.), Promoting learning on language learning: Lessons from a university setting (pp. 253-271). Multilingual Matters.

Ozawa, C. (2024). My experience when I joined LD30 for the first time. Learning Learning, 31(1), 116-117.

Sano, H. (2024). Excitement and surprise: my first experience at the LD30 conference. Learning Learning, 31(1), 118.

(高等教育研究開発センター

教授 畑江美佳・助教 今村有里)

## 高等研センター年報について



淑徳大学高等教育研究開発センターでは、2023年度に「淑徳大学高等教育研究開発センター年報第10号」を発刊いたしました。

現在、年報のHP掲載も実施しております。ご興味のある方は淑徳大学 高等教育研究開発センターHPにてご確認ください。

淑徳大学

高等教育研究開発センター NEWS LETTER 2023 第3号

発行日：2024年3月31日

編集：淑徳大学高等教育研究開発センター

TEL：043-265-7331 FAX：043-265-8310

E-mail：kaihatsu@soc.shukutoku.ac.jp